

茅 幸二 元所長逝去

茅幸二先生は慶應義塾大学で教授として活躍されていた最中の1999年に、分子科学研究所の所長として岡崎に着任され、自然科学研究機構発足直前の2004年3月末までの5年間、分子研の発展に尽力されました。茅先生は、物質科学研究を広い視野で捉えておられ、化学、物理学、生命科学などの実験研究と理論および計算科学研究が共存することの重要性を早くから説かれました。

茅先生は分子研を更に活性化するための数々の仕掛けを動かされました。2000年ごろを境に興った国のナノサイエンス振興施策を受けて、分子研を国際的な研究の一つのハブとして位置付けられました。2002年4月に発足した、分子スケールナノサイエンスセンターは、2000年に発足した統合バイオサイエンスセンターと並び、山手地区の新たなランドマークとなりました。平成

14年度(2002年)の分子研レポートの序論に茅先生のこのセンターに対する考えが書かれています。『広義の物質科学研究』を行う分子科学研究所が、単に物質創製という立場のみから立ち向かうのではなく、光分子科学および化学反応ダイナミクスとの立場からの関与を含めた多岐にわたる共同研究の場であると位置づけられた。』現在の分子研のあり方そのものを表している言葉に、茅先生の先見の明を感じます。分子研ではこの他、UVSOR-II高度化プロジェクトの推進や、超高速コンピュータ網形成プロジェクト(NAREGI)ナノサイエンス実証研究拠点を形成されましたが、全てが、茅先生の考える物質科学研究の在り方を体現された結果と思われる。

茅先生はその後、理化学研究所の中央研究所所長に就任されますが、そこでは物質科学研究に生命科学を取り込んだ「分子情報生命科学」研究事業の立ち上げに尽力されました。慶應大学で、理論と実験の統合を実現し(物理化学分野を実験と理論をイコールウエイトにした)、分子研では物質創製と計測を一体化したセンターを作り、そして理研では生命科学と情報科学まで取り込んだ事業の推進に尽力されました。

ご自身の研究に始まり、科学研究のあり方の理想を追い続けた茅先生の生き方は、狭い科学研究の世界に閉じこもりがちの我々研究者に常に前を向いて目を開くことを思い出させてくれるものでした。ご冥福をお祈りします。

茅先生の分子科学研究所に対するご貢献に対して心より敬意を表するとともに、生前、皆様から賜りましたご厚誼に対し深く感謝申し上げます。



平成29年10月30日 永眠 享年81

分子科学研究所所長 川合 眞紀

略歴

昭和11年10月20日生 北海道札幌市にて出生
 昭和36年 東京大学理学部化学科卒業
 昭和38年 東京大学大学院化学系研究科修士課程修了
 昭和41年 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士
 昭和41年 理化学研究所 研究員
 昭和45年 東北大学 理学部 助教授
 この間、昭和48年～昭和49年 米国・ベル研究所留学、研究員
 昭和56年 慶應義塾大学 理工学部 化学科 教授
 平成11年 分子科学研究所 第5代所長
 平成11年 総合研究大学院大学 教授 兼 構造分子科学専攻長
 平成16年 理化学研究所 和光研究所長 兼 中央研究所長
 平成20年 理化学研究所 次世代スーパーコンピュータ開発実施本部 副本部長
 平成25年 理化学研究所 研究顧問

榮譽

平成 2年 日本化学会学術賞
 平成13年 日本化学会賞
 平成17年 文化功労者顕彰
 平成25年 瑞宝重光章
 慶應義塾大学名誉教授、分子科学研究所名誉教授、
 総合科学研究大学院大学名誉教授、理化学研究所 名誉研究員
 平成 8年 慶応工学会理事
 平成13年 松前国際友好財団理事
 平成16年 ナノ学会 会長
 平成18年 豊田理化学研究所理事
 平成19年 泉科学振興財団理事
 日本化学会 名誉会員、日本表面科学会 功労会員、
 ナノ学会 名誉会員、分子科学会 名誉会員

茅さんと半世紀余 岩田 末廣 (分子科学研究所・総合研究大学院大学 名誉教授)

円覺寺での葬儀後もまだ実感がわかない。最後にお会いしたのは丁度一年前、慶応時代の教え子や共同研究者が開いてくれた茅さんの傘寿と私の喜寿を祝う会だった。会の締めで茅さんが、奥様和子さんに心のこもった感謝の言葉を述べられたのが強く印象に残っている。茅さんは、1961から70年の夏まで、大学院生・研究員として物性研・理研の長倉三郎(分子研第2代所長)教授の研究室に在籍した。大学院時代では、六本木の物性研から、茅さんの「ムスタング」に乗せて頂いて、本郷の化学教室の講義・講演会や日光での第4回分子科学若手夏の学校(茅さんが故藤山分子研教授らと組織した)に出席したことを思い出す。当時の物性研分子部門には助教授に伊藤光男第4代分子研所長、助手には吉原分子研名誉教授、安積東北大名誉教授が在籍していた。私自身を含めて、当時の大学院生の中にはその後いろいろな経歴で分子研の教授、助教授に着任した人が多い。また、茅さん、細矢お茶大名誉教授、花崎分子研名誉教授、宇田川東北大名誉教授(そして私自身)など物性研内で伴侶を射止めた。

茅さんの博士論文は電子スペクトルによる水素結合の研究であった。理研ではその研究を発展させるために、真空紫外顕微分光器の設計・組み立てを独力で進め、160 nmまでの測定系を構築した。更に、東邦大の梶原峻さんの協力を得て真空紫外垂直入射反射分光器も製作した。有機固体・結晶の分光研究を真空紫外領域に拡げる先端的な装置開発に成功し、水素結合系やペリレンなどのスペクトルを測定している。東北大、慶応大の研究室における装置開発の実力をこの時代にすでに発揮されていたのだ。東北大に移った伊藤先生に、研究室立ち上げに協力するよう請われて茅さんが仙台に移った後は、当時修士課程に入ったばかりの富宅(神戸大名誉教授)さんがこの真空紫外分光器を活用することになる。東北大での活躍ぶりについての紹介は、私には不適だが、三上東北大名誉教授や宇田川さんと共に、気体レーザー分子分光の世界トップの研究グループを作りあげ、多くの研究者を輩出したことは広く知られている。この間、ベル研のDr. M.B.Robin研究室に1年ほど滞在し、光音響分光研究の業績を挙げている。

慶応義塾大学には、工学部が理工学部に発展改組するに伴い化学科の立ち上げに、茅さんは教授として招聘された。この時、茅さんは「物理化学研究室」の半分を理論化学にあてるという大英断を下し、茅、岩田、富宅、大峯(分子研第7代所長)の研究室が始まった。当時の日本の大学の化学科には「理論化学」を表看板に立てた研究室は著しく少なかった。理論化学・計算化学に対する茅さんの先見性ある判断であった。科学研究における高性能計算機の重要性を当時から評価されており、UNIX OSのVAX11/750を83年に物理学科・化学科へ導入する際には強く援助して



ご両親の別荘で開いていた1989年の「茅研パーティー」。
茅・岩田研のOB/OGはもちろん3年生の女子学生も参加している。

くれた。その後分子研・理研時代を通じて、各時代の最先端計算機を基礎科学研究に活用する事業を支援・推進された。

今では想像が出来ないが、茅さんが慶大理工学部に研究グループを組織し始めた当時は、私立大学で基礎科学研究を推進し、研究人材を育成することは期待されていなかった。茅さんは、当初から、同時に着任した有機化学の山村教授や土橋教授と共に、新設の化学科を世界の先端研究を遂行し、優れた研究者を育てる場にするを目標していた（山村さんは停年記念の本で「茅さんを『戦友』という表現が一番ふさわしい」と記している）。化学科の卒業生は、現在では分子研はもとより多くの大学・研究所で活躍している。着任直ぐに始めたのはもちろん真空チャンバー作りだった。分子線、飛行時間差質量分析とレーザー分光を組み合わせた研究は、研究対象をそれまでの分子・分子クラスターに加えて、金属・半導体元素を含む多成分クラスターへと大きく広げ、分子分光だけでなく反応・合成・物性測定へと発展させていった。次々と組み上げるチャンバーとレーザー装置で実験室はたちまち一杯になった。92年には、東大の近藤保教授と共同で理研の和光研究所にクラスター研究の拠点の実験スペースを作ることができ、新装置開発によっていっそうの新分野への展開を可能にした。この中心になったのが、富宅さんの後任の中嶋敦（慶大教授）さんであった。研究は飛躍的に進展し、化学会賞、文化功労賞者の受賞に結び付く研究成果を得た。

当初から、茅・岩田研と呼ばせて頂いて、遊ぶのはもちろん、研究面でも多くの共同研究をさせて頂いた。私が分子研に移動した後に着任した藪下（慶大教授）さんとも同様な関係が続き、現在は中嶋・藪下研として共同研究が継続されている。茅さんの研究室創設時の精神は生き続けている。

大峯さんに続いて富宅さんが分子研に栄転したのは実力から言って当然だが、私が分子研に移ることになったのは正直想定外であった。茅さんが、第5代所長として分子研に来られると決まった時は、喜びと共に正直戸惑いもあった。私は停年を1年後に控えていたので、困難な業務を結局ほとんどお手伝い出来なかった。

感謝の気持ちを込めて、衷心からご冥福をお祈りします。

微笑みを偲んで 谷村 吉隆（京都大学理学研究科 教授）

「先生なんて、もったいぶった呼び方やめてくれよ」と、太い眉毛でニコニコおっしゃるかもしれませんが、お許しください。私が学部4年生として慶應義塾大物理学科に配属された時、茅先生は化学科の気鋭の教授でした。同級生であった青柳君が茅・岩田研の学生であったことが、茅先生を知る機会となりました。青柳君を訪ねて行くと、若い先生がニコニコしながら出てこられて、てっきり助手の方だと思ったら、それが茅先生でした。茅先生はしばらくの間「自分は学生と間違えられた」と、得意そうに話されていたそうですね。先生の告別式に向かいながら、35年前のことを思い出しました。

博士取得後4年半ほど海外で過ごし、1994年に私は分子研助教授として赴任しました。伊藤所長や岩田先生、吉原先生、大峯先生や、元同級生の青柳君、岩田研助手の池上さん、茅・岩田研の学生だった斎藤真司さんや南部伸孝さんなど、茅先生の仲間や学生たちに囲まれてのスタートです。茅先生が近藤先生や大峯先生と並ぶオーディオ狂である話とか、長倉先生のお酒を飲んで吉原先生と怒られた話など、奥様を見初めた経緯など様々な先生から、たくさんの武勇伝を伺っているうちに、自分がそこにいたような錯覚を感じるようになりました。直接的にも分子科学会や各種研究会等で、茅先生は私を見つけるとニコニコと近づいてこられ、真面目とも冗談ともわからない話のやりとりです。長倉先生を囲む会では吉原先生と共に「谷村君、長倉先生をサブちゃんと呼んでみてくれよ。三千円あげるから」、「谷村君なら出来るよ。」せっかく期待をかけて頂いたのに、答えられずすみません。

茅先生が分子研の所長に赴任されてからは、夕食時によくお供させて頂きました。教授会が盛り下がってくると、笑いを取らせるために、しばしば私を指名され、その期待に応えるべく私も頑張りました。総研大生だった妻との婚約を報告しに行くと、先生の奥様とともに、私たち2人を食事に連れて行って下さいました。奥さまと仲のよい様子に、私たち2人もそうなりたいなと思いました。ミッキーとミニーが出てくる結婚式の、主賓をお願いしたら、大変喜ん

で頂けたのも忘れられません。

茅先生が理研に移られた後は、お会いする機会がめっきり減ってしまいましたが、それでも出張の折や、京都大学内で私を見かけると、必ずニコニコ話しかけていただきました。また、何かの機会にお目にかかれるものだと、疑いもなく過ごしておりましたら、それが突然の訃報です。茅先生のニコニコした顔が、霞のように消えていく感覚に、深く沈んだ気持ちになりました。

告別式では慶應時代、分子研時代の懐かしい人に大勢会いました。皆、沈んだ面持ちをしておりましたが、その中に、ふと茅先生の微笑みを見た気がしました。茅先生の微笑みは、元気のない人には「もっと笑えよ」、働きすぎの人には「笑えよ」、笑っている人には「自分だけ笑うな」と語りかけている感じがいたしました。網膜に焼き付いたその微笑みを胸に、私も茅先生のように微笑んでいきたいと思います。太い眉毛はありませんが。

先生、お世話になりました。ありがとうございます。

茅先生を偲んで 佃 達哉 (東京大学理学系研究科 教授)

研究上の大先輩として、また分子研の所長として大変お世話になった茅幸二先生のご冥福をお祈りしつつ、拙文をしたためさせていただきます。

私が近藤保先生（東大名誉教授、故人）のもとで研究を始めた頃にはすでに、茅先生の研究室（当時慶應義塾大学）とは姉妹研究室とでもいうべき近い関係にありました。両先生の研究テーマがクラスターで共通していたこと、中嶋敦先生や野々瀬真司先生などの人的な交流があったことなどいくつか理由はありますが、なにより盟友としての友情が我々にも感じられたからだと思います。学生当時の私の目に映る茅先生は、飄々として洒脱でユーモアたっぷり、そのお人柄と感性が色濃く反映された研究内容には憧れの気持ちをもっていました。ただ一方で、我々とは住んでおられる世界が違うのだなと感じることもありました。茅先生が慶應義塾大学にご在職中に、岩田末廣先生と合同で開催されていたパーティーに近藤研の学生も呼んでいただいたことがありました。海が一望できる鎌倉のご邸宅でのパーティーは楽しくも眩しく、我々は完全に舞い上がってしまいました。その結果、同期の一人は屋根に登って瓦を割ってしまうという奇行を演じてしまいました。学生時代に茅先生からいただいた、忘れ得ぬ思い出があります。分子構造総合討論会での招待講演の中だと記憶していますが、当時大学院生であった私の研究（もちろん近藤先生の仕事としてですが）を茅先生に褒めていただき、体が震えて赤面するほど感動したことを今でも覚えています。20年以上前の一瞬の出来事ですが、実績という頼るすべを持たない若者に勇気を与えるには十分でした。

その後茅先生が慶應大学の任期中に分子研に所長として移られたことは大変な驚きでしたが、その分子研で助教授として研究の場を与えていただけるとは当時は思いもしませんでした。当時の私はクラスターを化学物質として合成する方向でなんとか自分を生かしたいと思っていましたが、それがたまたま茅先生の見据えておられたナノサイエンスの展望に沿っていたのではないかと想像します。もちろん野心と想いだけで研究はうまくいくはずもなく、成果の出ない期間が続きました。分子研では、毎年年初に全PIが来年度の研究計画を所長と研究顧問の前で15分ずつ披露するという恒例行事がありました。サイエンスに対しては大変厳しい茅先生の前で話すことは私にとってはとても恐ろしい時間でしたが、毎回頑張ろうという気持ちを新たにさせていただいたことは大変有難いことでした。ナノサイエンスセンターの設立や新プログラムという大型プロジェクトの立ち上げなど、予算を集めて人を動かすことに関し



受祝賀会での一コマ（2014年）。

て尋常でない能力をもつ茅先生に、私が外部予算を全く取れないことを随分心配していただいたこともあります。敬愛する茅先生にご心配をかけ、面目を潰しているのではないかという想いは心苦しいものでした。ただ、若手研究者を支援しようという分子研の風土や当時の助手の根岸さん（茅研の卒業生で現在東京理科大学教授）の頑張りのお陰で、4年目くらいからぼちぼち成果が出るようになり、やっと茅先生の目をみて喋れるようになったことを思い出します。

東大に移って3年目の2014年に学科長として、学科の外部評価を実施しました。岩村秀先生を委員長として、茅先生にも評価委員としてご尽力いただきました（下の写真）。学科長の立場からは、大局的な視点から様々な建設的なご意見をいただいたことに感謝申し上げる一方で、茅先生の切り拓かれたクラスター化学の領域を引き継ぐ一人として奮闘している姿を見ていただけたことは、個人的には大きな喜びでした。また、2014年5月には、茅先生の瑞宝重光章のご受賞記念の祝賀会に参加させていただきました。祝賀会の副題が「茅先生への感謝の気持ちと愛を語る」というもので、皆さんの気持ちが滲み出た大変暖かい会でした。その会で、皆様の前で茅先生への感謝の気持ちを面と向かって喋らせていただける機会をいただきました。前ページの写真はその時のもので、茅先生と一緒に写ったほぼ唯一の写真です。この時にいただいた激励の言葉は今も私を暖かくしてくれます。こうして思い返してみると、最高の理解者である茅先生に褒められたい、ということが私の研究活動の駆動力の一つであったことに気づかされます。定年のときに茅先生からよく頑張ったと肩を叩いていただけるよう、私に与えられた時間で精一杯努めを果たしていきたいと思います。茅先生、有難うございました。どうぞ安らかにお休みください。



外部評価委員として、東大化学教室教授とともに（2014年）。

分子科学研究所長5年間の茅先生 小杉 信博（分子科学研究所 教授）

茅先生は私にとって3人目の所長で、選考に直接、関わった最初の方でした。所長選考では通常、所内の人たちは所内の方を、所外の人たちは所外の方を主に候補にあげたうえで絞り込みの議論に入ります。慶応義塾大学に茅・岩田研が発足した当時、私は岩田先生から助手にと誘われたいきさつもあり、茅先生、助手の富宅さん、大峯さんなど研究室の方々と親しく交流し、皆さんのお人柄もよくわかっていたので、態度を決めかねていました。そのため、私は所内の助教授陣から突き上げを食らい、記憶に残る所長選考になりました。

所長になられた茅先生は、管理棟から逃げてきたと話され、我々の居室をしばしば訪ねてこられました。当時、所長室は管理棟にしかありませんでした。これまで私は6人の所長を経験しましたが、所長専用の椅子に座ったお姿を全く思い出せない所長は茅先生だけです。また、所長によって予算を投入する先が研究系と施設系のどちらかに振れるのですが、茅先生は明らかに後者でした。各施設の打合せの会議に顔を出されるなど、現場が大好きで、研究者を

支える施設の活性化と充実に力を注がれました。装置開発室など施設固有の難しい問題（人の処遇等）も次々と解決されました。

当時、概算要求は所長が代表して学術機関課と交渉するのが常でしたが、UVSORは分子研の存続にも影響する最重要課題とのことで、私も随行しました。文部省の薄暗い廊下でなかなか来ない順番を待ってやっと入室できて、役所対応しか得られず、着任早々の茅先生と2人がっかりしたのを今も鮮明に思い出します。その後、学術審議会や振興調整費などのヒアリングに臨み、最終的には大型の補正予算が手当てされ、茅所長の代でUVSOR-IIへの高度化が実現しました。分子研を離れてからも茅先生の心配は尽きず、UVSORが次のステップに進むためにいろいろ影響力のある方を紹介していただきました。茅先生がようやく安心されたのは2012年のUVSOR-IIIが完成してからです。やっとご恩が返せた気がしました。

茅先生は、主幹施設長会議等での合議には向いていない事案に関して、それぞれ非公式に人を使って処理されていました。私は各施設の現場から予算や人についての要望を集める役を任されました。分子研の人事計画を考える役や若手人材育成にあまり関心のない教授や助教授への交渉



UVSOR-II完成祝賀バーベキューパーティーにて。

役も仰せつかりました。これらは私のような下っ端教授にできることではなかったのですが、茅先生は私をいろいろ試しておられたようでした。また、法人化に向けた動きを把握するため、国立大学長の会議や大学共同利用機関長の会議の代理出席も任されました。会議では機構長の伊藤光男先生から、茅は何をしているのだと、私が代わりによく叱られたものです。茅先生は、その代償？として、年末にかけていろいろな所内会議が集中する中、私は毎年、家族スキーのためにズル休みすることを機嫌良く認めて下さっていました。

茅先生は、施設充実の戦略の一つとしてのナノサイエンスセンター設立の概算要求を満額回答で通すなど、文科省を動かせるまでの力を発揮されるようになっていました。また、創成的基礎研究費「新プロ」で化学と物理の融合を目指して機関間（および人的）ネットワークを主導するなど、分子研を越えた幅広い活動をされるようになりました。そのようなこともあり、理研の川合さんから、茅先生を理研に引き抜きたいが分子研は問題ないかとの問い合わせが私にありました。歴代の所長退任後の機構長職は法人化によってなくなり、次の職のことを考え始めていた茅先生は、分子研の連携先として理研は悪くない、法人化のタイミングで新しい所長に切り替わるのも悪くない、と任期終了1年前の退任を表明されました。理研に移られた茅先生は、後任の中村所長と相談して、約束通りに理研と分子研の連携事業（エキストリームフォトニクス）を実現しました。「京」関連の連携にも一翼を担われました。

法人化の際に、他の大学共同利用機関（研究所）は副所長ポストを新たに作りましたが、分子研では研究総主幹ポストを置くことにしました。分子研の所長に必要なのは、番頭役ではなく、研究者側を代表して所長に苦言を呈することのできる役であるという強い考えがあったからです。茅先生は、法人化で強まるであろうトップダウン施策や評価による切り捨てによってみんなが同じ方向に向かう組織になることを非常に嫌っていました。茅先生は度量が大きく、苦言を受けるなど多面的な見方ができる方でした。私が相談事を茅先生に持っていったとしても、なぜか話が違う方向になって、最後には笑って終わることがたびたびありました。当時は煙に巻かれることが多いと感じていたのですが、私がいかに近視眼的だったからではなかったかと今は思います。

茅先生は、長倉先生譲りの厳しい意見を持ちながら、伊藤先生譲りの優しさがあつた気がします。人のつながりや人材育成を非常に大事にされていました。多くのプロジェクトに関わりながら、プロジェクトそのものがたとえ失敗に終わっても人が育てば成功という信念の持ち主でした。茅先生にご報告することは叶いませんでしたが、私はこの4月より茅先生が築かれた人のつながりが残っている研究機関に異動します。これまで私を育てて下さった茅先生の指導方法や考え方を思い出しつつ、次の職に活かしたいと思います。いろいろとありがとうございました。